Ⅱ−６　湯舟坂２号墳出土 鞆金具・鉄鏃の意義

土屋 隆史

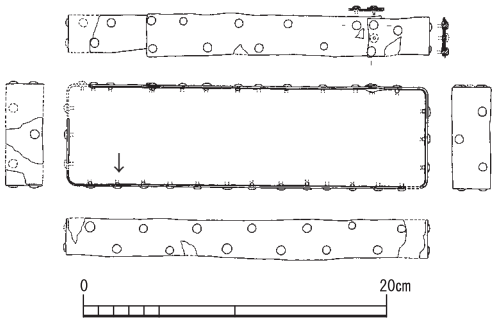
１．はじめに

湯舟坂２号墳は京都府京丹後市久美浜町須田に所在する直径 18 mの円墳であり、横穴式石室からは金銅装双龍環頭大刀、銀装圭頭大刀、直刀、鉄鏃、鞆金具などの武器武具、轡、鞍、鐙などの馬具、玉、耳環などの装身具、銅鋺、鉄釘、須恵器、土師器などが出土した（奥村編 1983）。湯舟坂２号墳を再評価するにあたり、本稿では湯舟坂２号墳出土の鞆金具と鉄鏃を研究対象とする。報告書が刊行された後の研究状況や新たに確認された類例をふまえて、これらの考古学的意義について検討する。

２．湯舟坂２号墳出土鞆金具の特徴

鞆は古墳時代前期からみられる倭独自の盛矢具であり、断面長方形の収納部に矢の鏃身部を上向きにして入れるという特徴がある。古墳時代前期の鞆は飾られた鞆（装飾型鞆）、古墳時代中期以降の鞆は飾られない鞆（無文型鞆）と呼ばれる（杉井 2013:45 頁）。また古墳時代中期以降の鞆には横帯金具や凹形金具が装着されるようになり、後期になるとその出土数が増加する。湯舟坂２号墳からは横帯金具が出土しており、これは飾られない鞆（無文型鞆）の中でも鉄製責金具付革鞆（奴凧形の鞆）に相当する（杉井 2013:45 頁）。

ここでは本例の注目すべき特徴と、類例からみた編年的位置づけについて述べる。なお本稿では土屋 2018a・2023 で述べた鞆金具の各部名称を用いる（図 1・2）。



裏面の有機質構造（上図の↓箇所）

図１　京都府湯舟坂２号墳出土鞆金具（S=1/5）

（１）横帯金具の特徴

残存状態　横帯金具は一周するように保存処理がなされているが、報告当時は４つの破片にわかれていた（奥村編 1983: 図版第 30）。特に四隅は欠損しており、この部分は保存処理の際に後補されたようである。

材質　金具は鉄製である。目視による観察では鋲も鉄製であると考えられる。

鋲配置　鋲は上下２段に交互に配置される千鳥配置であり、残存する鋲の直径は約

3.7mm である。鋲配置は筆者分類でいう 1 類に相当する。

収納部奥行き　　現状では、断面長方形を呈する収納部の短辺（奥行き）は約 6.6㎝である。ただ、元々四隅は欠損しており、保存処理の際に後補された部分もあるため、この数値は多少ずれる可能性がある。

収納部長　　収納部長辺は約 23.7㎝である。

金具幅　　金具の幅は 2.4 ～ 2.8㎝である。

構造　　長短 2 枚の金具からなり、長い金具を長方形になるように折り曲げ、裏側 2 箇所で短い金具が鋲留されている。筆者分類でいう「一周」に相当するが、 1 枚の長い金具を裏側で鋲留するものとは異なる。

有機質　　金具の裏面には有機質が良好に残存している（図 1 下）。表面から順にみると、金具、細い糸からなる織物、太い糸からなる織物の順に確認することができる。細い糸からなるものは繊維の撚りが明確ではなく、繊維を引き揃えて糸が構成されていることから平絹、太い糸からなるものは繊維の右撚りが明確であることから麻の布である可能性が考えられる[(1)]。報告書では、細かい布は錦織り、粗い布は麻の平織りであろうと指摘されている（新納 1983b：121 頁）。経糸の方向についてであるが、平絹と布はともに金具の長辺に経糸がくるように、金具の縦幅にあわせて織物が付けられている[(2)]。0.5㎝間の織り密度は、平絹で経糸 20 本、緯糸 10 本、布で経糸 7 本、緯本 5 本である。現状では織物に縁飾は確認できない。四隅が欠損していたため、四隅で織物がどのように貼り付けられていたのかも不明である。なお、本書Ⅱ-5 によると、本例の後ろ側の金具（図 1 上側）では、これらの織物の間に経錦がみられることが指摘されている。

横帯金具の裏面には底板に由来する木質が付着することが多いが、本例には木質は確認できない。木質が付着していれば横帯金具が鞍の底板に装着された金具であることがわかるが、本例の場合は装着箇所が確定できない。横帯金具は、有機質製鞍にみられる横帯の材質を有機質から鉄に置き換えたものとする見解があり（杉井 2013：45 頁）、筆者もその可能性が高いと考える。そのため、この金具の装着箇所として、収納部中央付近である可能性も考えられる。

報告書では鞍の有機質構造として、長方形をなす木製の容器の外側にやや荒目の布をはり、さらにその上に細かい目の布をはって、その外側に幅 3 ㎝前後の鉄板の帯をまわし、鋲で留めたものと指摘されている（新納 1983b：99 頁）。現状織物が確認されているのは金具裏面のみであり、金具の縦幅にあわせて織物が付けられている。また他の古墳から出土した鞍金具に付く平絹には伏組繍という縁飾が付くことが多く、平絹の縦幅が鞍金具の縦幅と同じであったことがわかる。島根県上塩冶築山古墳例や栃木県伯仲 1 号墳例のように、織物を巻いて鞍本体が作られていたとする復元案もあるが（大谷 1999a：78 頁、小森 2019：35 頁）、本例の場合は織物が鞍の収納部全体に及ぶかどうかは不明である。また、収納部底部は木製である可能性が高いが、収納部本体の材質は現状では分からない。

（2）横帯金具の類例と本例の位置づけ

①先行研究

大谷晃二は鞍金具の変化の方向性として、鞍の収納部幅と奥行きの比率（幅 / 奥行き）が増加するもの（扁平化するもの）、鋲数が減少し省略化されるものが新しいとし、藤ノ木古墳例→

経僧塚古墳例・御崎山古墳例→湯舟坂２号墳例→下川原横穴墓例（図１・図4-6～10）という製作順序を推定している（大谷1996:65頁、大谷1999b:174頁）。その上で、Ⅰ期（鋲を多く打ち、形状も剣菱形で定型化していない。藤ノ木古墳例。TK43型式併行期）、Ⅱ期（形状が定型化し、幅/奥行きが3.1前後、小型の鋲を２列に密に打つ。経僧塚古墳、御崎山古墳例。TK43型式併行期）、Ⅲ期（幅/奥行きが3.6前後と扁平化する。鋲は２列千鳥となったり、鋲も大型化して粗く打ち、帯状鉄板自体の幅も細くなるなど、製作の簡略化が見られる。湯舟坂２号、下川原横穴墓例。TK43型式併行期末からTK209型式併行期）に区分した（大谷1999b:174-175頁）。また、装飾性の高いものから簡略化されたという変化の方向性を推定し、銀装の藤ノ木古墳例と鉄地銀被の鋲がみられる上塩冶築山古墳例を上記の事例の中で古く位置づけた（大谷1996b:175頁）。

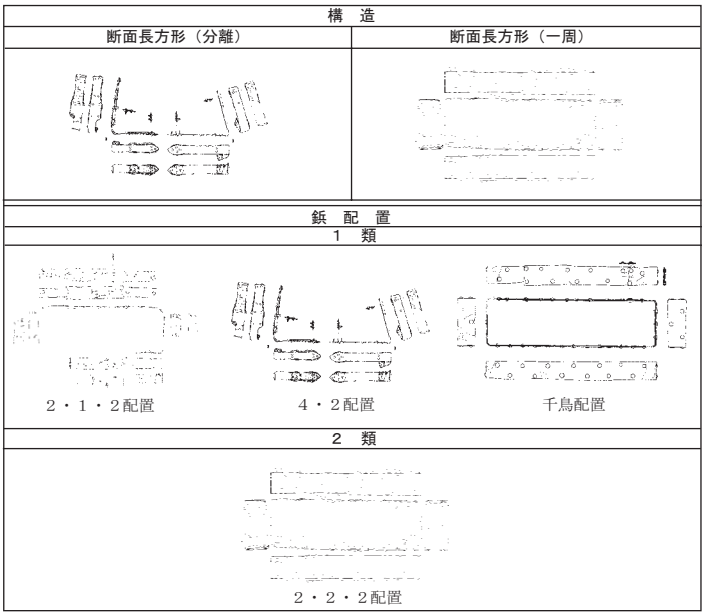


図２　鞍金具（横帯金具）の諸属性

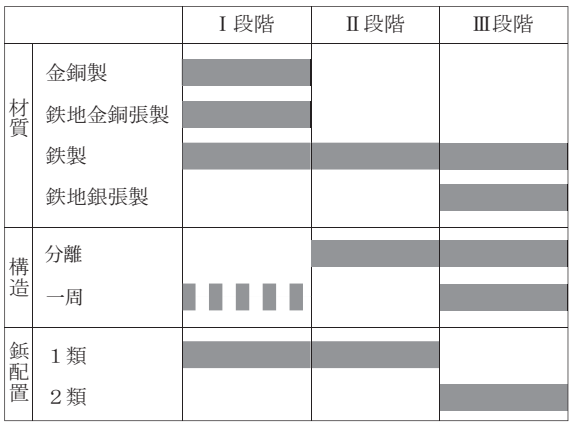


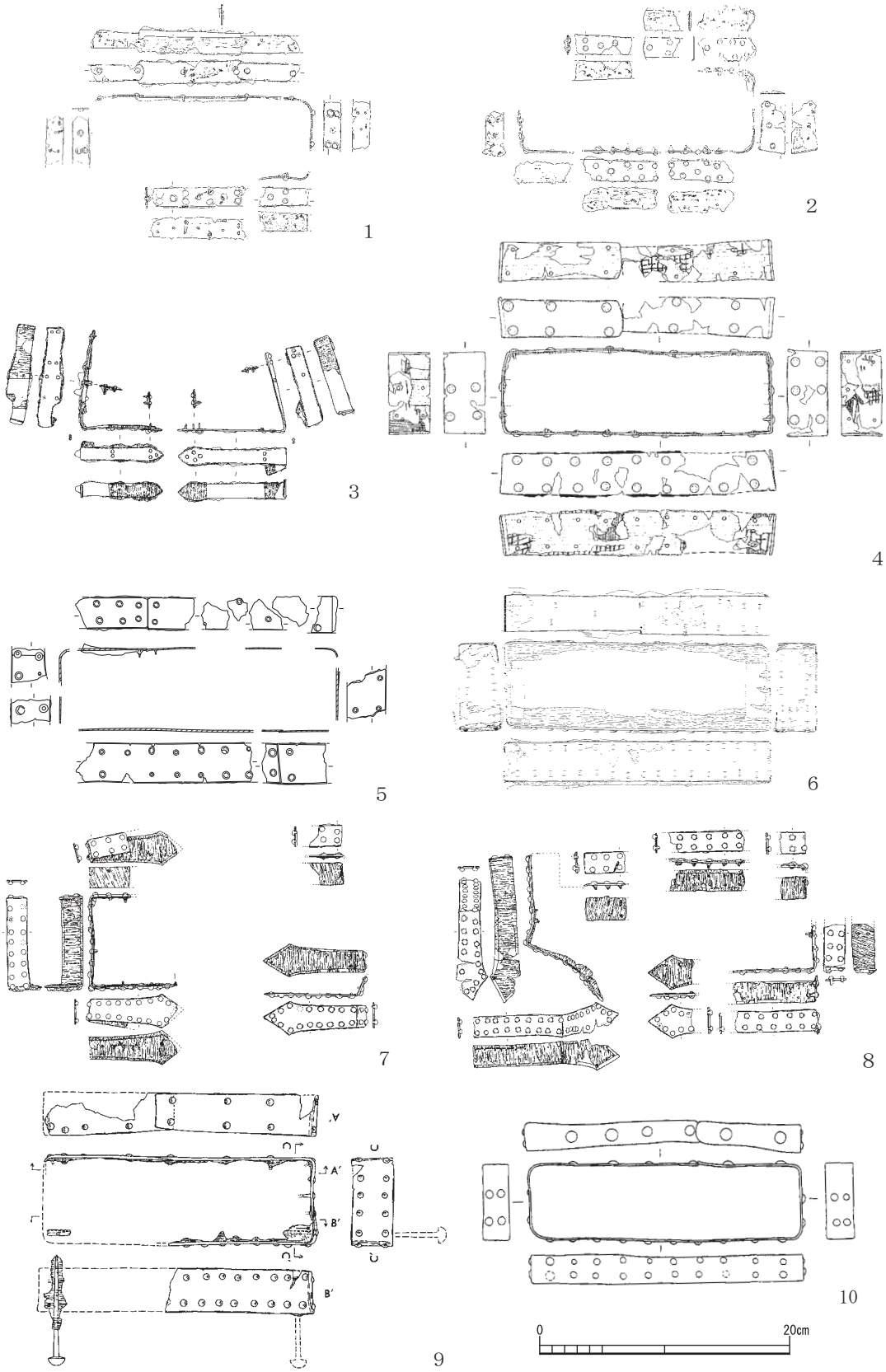
図３　鞍金具（横帯金具）の編年

その後、鞍金具の新出事例を含めて総合的に検討した結果、鞍金具はTK73型式期頃から継続してみられることが判明した（土屋2018a:148頁）。現状の筆者の集成では、横帯金具は計41例が確認できる。筆者は鞍金具の属性分析をおこない、材質、構造、鋲配置から、３つの段階に区分した（土屋2018a・2023）。Ⅰ段階はTK208～TK23・47型式期、Ⅱ段階はMT15～TK10型式期、Ⅲ段階はTK43～TK209型式期頃である。

②属性分析（図２・3、表１）

鞍金具の変化の方向性を考えるうえで、材質、構造、鋲配置が有効であると考えている（図２）。材質は金銅製、鉄地金銅張製から鉄製、鉄地銀張製となり、鋲配置は２つ対とならない１類から、２つ対となる２類に変化する。また構造は分離したものに一周のものが加わる（図３）。これらの属性を詳しく検討する。

湯舟坂２号墳例（図１）は、鉄製、構造一周、鋲配置１類であり、同様の属性構成がみられる事例は、現状では他にない。鉄製で一周の構造がみられる横帯金具としては、栃木県伯仲１



1．2．大阪 峯ヶ塚古墳　3．奈良 寺口忍海H－1号墳　4．栃木 伯仲1号墳　5．千葉 城山1号墳
6．千葉 経僧塚古墳　7．8．奈良 藤ノ木古墳　9．島根 御崎山古墳　10．島根 下川原横穴墓

図4　鞍金具の類例（S=1/5）

表１　鞍金具の諸属性

都道府県	市町村	古墳名	金具	材質	鈑配置	構造	幅/奥行き	有機質構造	鞍編年	鉄鏃編年	陶邑編年
奈良	五條市	五條猫塚①	凹形帯横帯	金銅	１類	?	?	獣毛＋平織物＋木質	Ⅰ	中期２	—
奈良	五條市	五條猫塚②	凹形帯横帯	金銅	１類	?	?			中期２	—
京都	宇治市	宇治二子山南	横帯	鉄金	１類	一周？	?	皮革		中期４	—
大阪	藤井寺市	長持山	横帯	鉄	１類	?	?	皮革		中期４	—
栃木	栃木市	七廻り鏡塚①	—	—	—	—	2.93	板状の薄い革、革紐、竹軸	Ⅱ	後期１	TK10
栃木	栃木市	七廻り鏡塚②	—	—	—	—	2.57				
大阪	羽曳野市	峯ヶ塚①	横帯	鉄	１類	?	?	笈目の平絹＋木質（底板木目横）		後期１	MT15
大阪	羽曳野市	峯ヶ塚②	横帯	鉄	１類	?	?				
奈良	葛城市	寺口忍海Ｈ－1号	横帯	鉄	１類	?	2.13	木質（底板木目縦）		後期１	MT15
奈良	葛城市	寺口忍海Ｈ－20号	横帯	鉄	１類	分離	?	平絹＋皮革		後期１	TK10
福島	いわき市	餓鬼堂２号横穴	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（細）＋布（太）＋木質（底板木目横）	Ⅲ		
福島	いわき市	餓鬼堂23号横穴	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（密）＋布（粗）＋木質（底板木目横方向）			
福島	いわき市	館山横穴群	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（細）＋布（太）＋木質			
栃木	栃木市	伯仲１号	横帯	鉄	２類	一周	3.17	笈目の平絹（伏組繍）＋経錦＋麻織物＋木質（底板木目横、側板木目縦）		後期２	—
埼玉	皆野町	柳瀬１号	横帯	鉄	２類	?	?	平絹＋木質		後期２	—
千葉	香取市	城山１号	横帯	鉄	２類	一周	?	平絹＋木質（底板木目横）		後期２	TK43
千葉	山武市	経僧塚	横帯	鉄	２類	一周	3.02	笈目の平絹（伏組繍）＋木質（底板木目横、側板木目縦）		後期３	—
千葉	木更津市	金鈴塚	横帯	鉄	２類	?	?	笈目の平絹（細）＋布（太）＋木質（底板木目縦か）		後期３	TK209
静岡	藤枝市	八幡２号	横帯	鉄	２類	?	?			—	TK10～
静岡	菊川町	宇藤A１号横穴	横帯	鉄	２類	?	?			後期２	TK43
静岡	相良町	稲荷山１号	横帯	鉄	２類	?	?			後期２	TK43～TK209
静岡	富士川町	谷津原７号	横帯	鉄	２類	?	?			後期２	—
静岡	藤枝市	白砂ヶ谷C1号	横帯	鉄	２類	?	?			後期２	TK217新～
三重	亀山市	井田川茶臼山①（箱式石棺外Ⅰ群）	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（細）（縁かがり、伏組繍）＋布（太）＋皮革、木質（底板木目横）		後期１	MT15～TK43（追葬）
三重	亀山市	井田川茶臼山②（箱式石棺外Ⅰ群）	横帯	鉄	２類	?	?				
三重	亀山市	井田川茶臼山③（箱式石棺外Ⅰ群）	横帯	鉄	２類	?	?				
三重	亀山市	井田川茶臼山④（箱式石棺外Ⅰ群）	横帯	鉄	２類	?	?				
愛知	岡崎市	車塚09区080SZ石室	横帯	鉄	２類	?	?			—	—
京都	久美浜町	湯舟坂２号	横帯	鉄	１類	一周	3.59	平絹（細）＋布（太）		後期３	TK43～TK217
京都	福知山市	弁財１号	横帯	鉄	２類	?	?				
大阪	茨木市	青松塚	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（伏組繍）＋皮革＋平絹		後期２	TK10～
奈良	斑鳩市	藤ノ木①	横帯	鉄	２類	分離	?	木質（底板木目縦）		後期２	TK43
奈良	斑鳩市	藤ノ木②	横帯	鉄	２類	分離	?	木質（底板木目縦）		後期２	TK43
島根	松江市	御崎山	横帯	鉄	２類	一周	3.16	笈目の平絹（細）（伏組繍）＋布（太）＋木質（底板木目横、側板木目縦）		後期２	TK43
島根	出雲市	上塩冶築山	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（細）（伏組繍）＋布（太）＋木質（底板木目横、側板木目縦）		後期２	TK43
島根	石見町	下川原横穴	横帯	鉄	２類	一周	3.71	平絹（細）（伏組繍）＋布（太）＋木質（底板木目横、側板木目縦）		—	TK43
香川	善通寺市	王墓山	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（細）（伏組繍）＋布（太）＋皮革		後期１	TK10～（追葬）
福岡	岡垣町	兎ギ坂１号	横帯	鉄	２類	?	?	平織物		後期１	MT85～
福岡	宇美町	宇美観音浦ＫＳ３号	横帯	鉄	２類	?	?			後期２	TK43～
福岡	嘉麻市	宮ノ上４号横穴	横帯	鉄	２類	?	?			後期２	—
福岡	壱岐市	双六	横帯	鉄	２類	?	?	平絹（細）＋平織物（太）＋木質		後期２	—
福岡	大野城市	善一田18号①	横帯	鉄	２類	分離	3.5?	笈目の平絹＋経錦＋木質（底板木目横）			TK209
福岡	大野城市	善一田18号②	横帯	鉄	２類	?					TK209

〔凡例〕？：欠損により不明。－は出土していない。空欄は未確認。鉄金―鉄地金銅張製。幅/奥行きは、鞍の収納部幅と奥行きの比率。有機質構造は金具側から順に記載している。（細）（太）は糸が細いもの太いもの。（密）（粗）は織密度が密なもの粗いもの。鉄鏃編年：(水野2009)。陶邑編年：(田辺1981)。

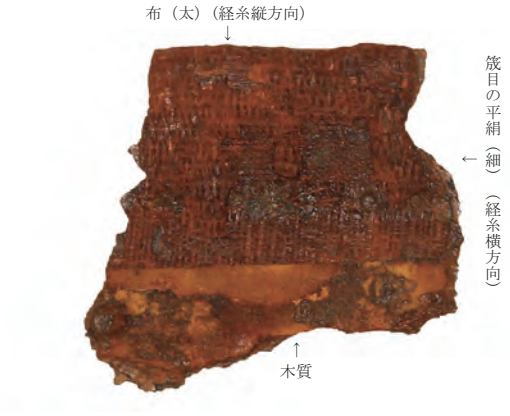


図５　千葉県金鈴塚古墳出土鞍金具の有機質構造

号墳（図４-4）、千葉県城山１号墳（図４-5）、千葉県経僧塚古墳（図４-6）、島根県御崎山古墳（図４-9）、島根県下川原横穴墓例（図４-10）が挙げられる。これらはⅢ段階にみられる特徴である。

また、鉄製で鋲配置１類がみられる横帯金具としては、大阪府長持山古墳例、峯ヶ塚古墳例（図４-1・2）、奈良県寺口忍海H-1 号墳例（図４-3）、寺口忍海H-20 号墳例が挙げられる。これらはⅡ段階にみられる特徴である。

このように、湯舟坂２号墳例は筆者の編年ではⅡ・Ⅲ段階に位置づけられるものである。ここでは別の属性をふまえながら、より詳しく編年的位置づけを検討する。

先述したとおり、大谷は鋲数と幅 / 奥行きの比率などから、藤ノ木古墳例→上塩冶築山古墳例→経僧塚古墳例・御崎山古墳例→湯舟坂２号墳例・下川原横穴墓例という変化を推定した（大谷 1999b：175 頁）。だが、これらはいずれも陶邑編年 TK43 型式期を含む時期に築造された古墳とされており[3]、共伴遺物の編年的位置づけからはこの変化を検証することができない。

そのため、上記の細かな変化については現状では追認できないが、広い時間幅でみたときに、幅 / 奥行きの比率は変化の方向性を示す属性として有効であると考える[4]。表１では幅 / 奥行きの比率を示した。Ⅱ段階の事例は比率が３より小さく、Ⅲ段階の事例は比率が３より大きくなっており、大谷が指摘するように収納部が扁平化するという変化の傾向がみられる。幅 / 奥行きの比率は、Ⅱ、Ⅲ段階を区分する一属性として捉えることができるだろう。改めて湯舟坂２号墳例をみてみると、幅 / 奥行きの比率は 3.59 であり、扁平な収納部であるといえる。これはⅢ段階にみられる特徴である。

このように、本例には新旧の属性がみられ位置づけが難しいが、幅 / 奥行きの比率という属性に注目すると、筆者の編年でいうⅢ段階で捉えるのが妥当であると考える[5]。

③有機質構造

有機質構造として細い糸からなる織物（平絹か）と太い糸からなる織物（布か）となる事例は、千葉県金鈴塚古墳（図５）、島根県御崎山古墳（図７-2）、上塩冶築山古墳（図９-2）、下川原横穴墓例などが挙げられる。これらには木質や縁飾が付けられておりその点は異なるが、本例の有機質構造はⅢ段階の鞍金具に通有の特徴であるといえる。

（３）両頭金具の用途

諫早直人氏より、湯舟坂２号墳出土の両頭金具（図６）が鞍の底板に打たれたものである可能性はないかというご指摘を頂いた。ここでは両頭金具の用途について考えてみたい。

①特徴

１は現存長 4.8㎝、軸部径 0.8㎝、鍔部径 1.8㎝であり、軸部下側が欠損している。２は全長 7.2㎝、軸部径 1.1㎝、鍔部径 2.1㎝、鍔部間長 6.1㎝、３は全長 7.1㎝、軸部径 1.0㎝、鍔部現存径 1.5㎝、鍔部間長 6.1㎝である。

これらは円柱状であり、上下両端が丸くなっている。弓に装着される両頭金具特有の革金具は確認できない。また上下端の内側には鍔状の突起が確認できる。軸部とは別造りで、ワッシャーのようなものと考えられる。革金具の折り返し部によくある切り込みはみられない。報告書では木目が軸部と平行方向になるように図化されている（花谷 1983:61 頁）（図６-1 ～ 3）。現状では保存処理後であるため報告書作成時と状態が異なっているが、７の上側につく木目は軸部と直交方向であるようにみえる（図６-7）。その他の木目は明確ではないが、報告書の情報をふまえると、木目は軸部と平行方向と直交方向のものがあるようである。また軸部の中央付近で木質の切れ目がみられることから、２つの木材の合せ目であり、これらを繋ぎ合わせるためのものであったと考えられる。弓に装着される両頭金具の場合、基本的に両頭金具の軸部に対して直角方向の木質が付くとされ（三好 2009:210 頁）、２つの木材の重なりも確認できない。これらの理由から、本例は弓に装着された通有の両頭金具ではないと考える。

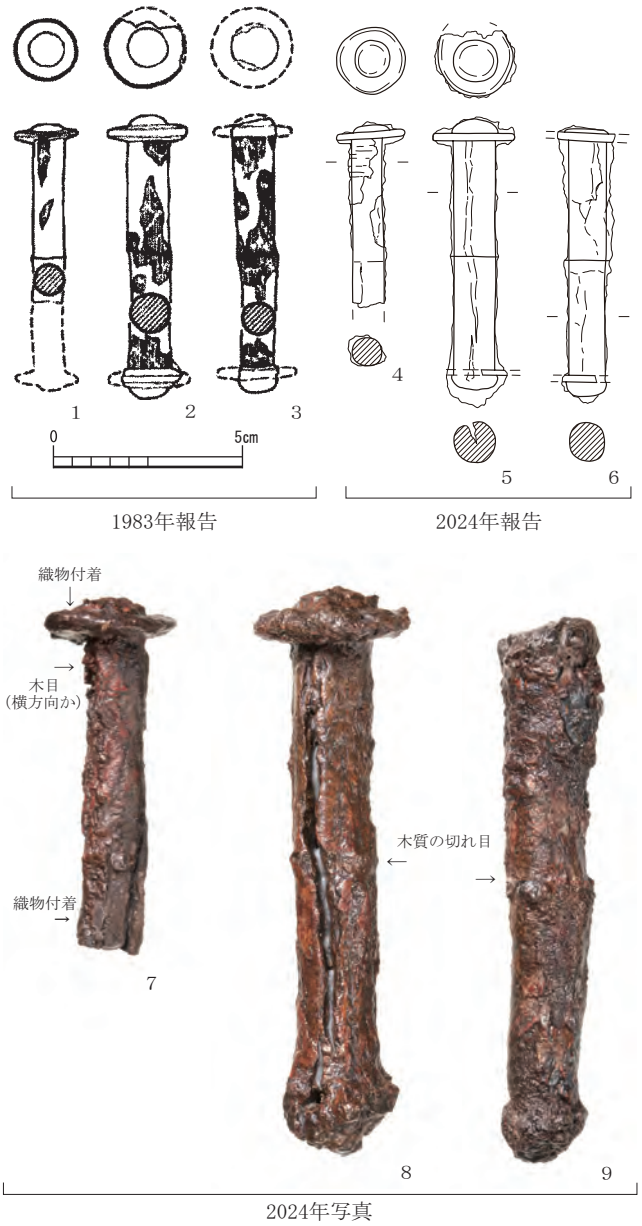


図６　湯舟坂２号墳出土両頭金具（図面は S=1/2）

４の鍔部と軸部には織物がわずかに付着しており、両頭金具、木質、織物の順に確認できる。これらの織物は、繊維の右撚りがはっきりしており、鞍金具に付着する布の特徴に近い。このような特徴をふまえると、本例が鞍金具近くに装着された可能性はあると考えられる。

②出土状況

報告書によると、この金具の少なくとも１点は横穴式石室の３区から出土したものである（奥村編 1983:37 頁。鞍金具と記載されている（図 10 下））。鞍金具が出土した１区から離れているが、３区で出土した大刀が奥壁の個体と接合していることから、この金具が元々は１区の鞍金具近くに副葬されていた可能性はあるようだ。

③底板に大型鋲が打たれた事例

報告書でも言及されているが、底板に打たれる大型鋲は島根県御崎山古墳例にみられる（新

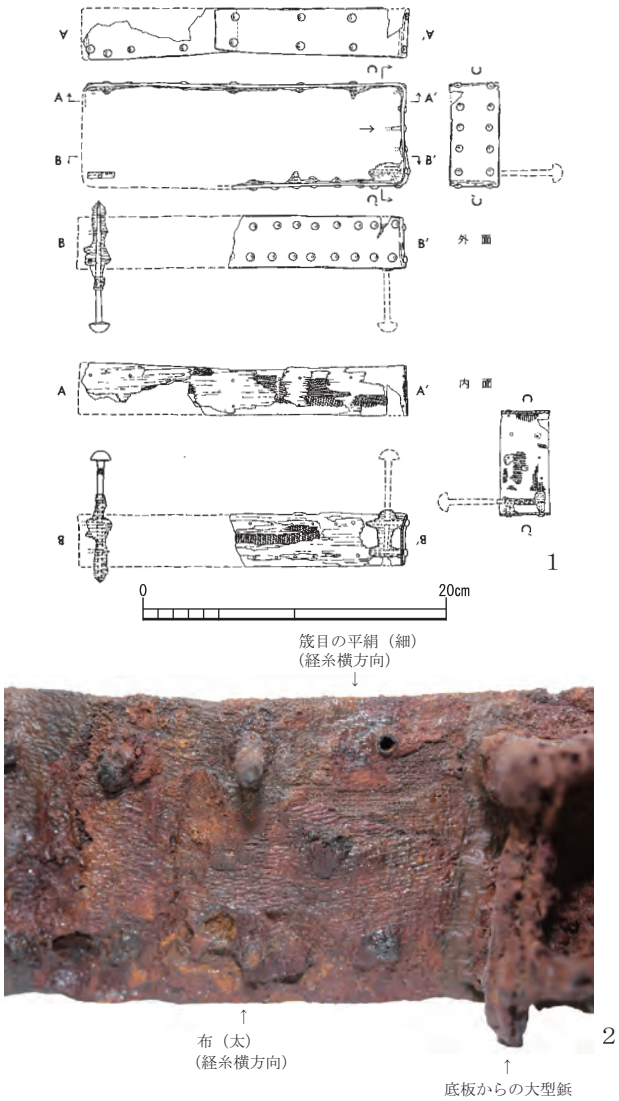


図７　島根県御崎山古墳出土靫金具（S=1/5）

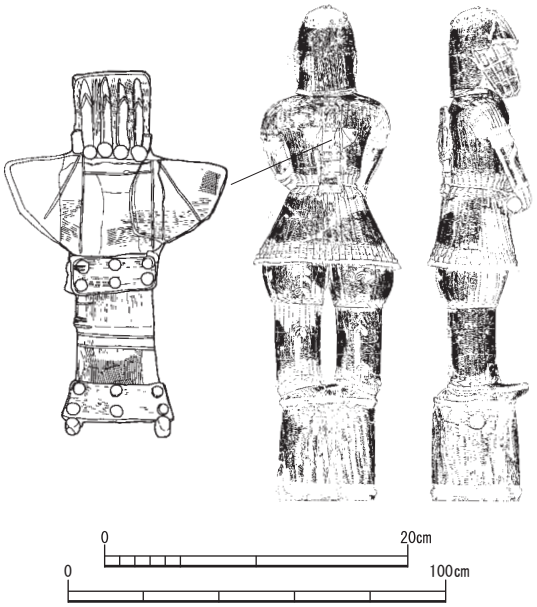
納 1983b:99 頁）。底板底面の表側両端に１本ずつ鋲が打たれており、総長 8.7㎝、鋲径 1.2㎝、鋲高 0.7㎝、鋲頭から 2.9㎝までは木質がまったくない（図７）。木質部には異なる部材の合せ目などは認められず、この大型鋲は木材を留める上では全く無意味な位置に打たれていることから、刀装具の蟹目釘のように、靫の下面保護の役目をするものと指摘されている（大谷 1996:32 頁）。湯舟坂２号墳例は上下頭がともに丸くなっているのに対して、御埼山古墳例は底板側が頭部、内側が脚部となる鋲であり、違いがある。

また報告書でも言及されているが（新納 1983b:99 頁）、群馬県太田市飯塚町出土の埴輪武装男子立像（国宝　挂甲の武人）が背負う靫の収納部には２点の横帯金具、底には２点の鋲頭が表現されている（図８）。

このように靫の底板の底面から上向きに大型鋲が打ち込まれる事例は確認されており、両頭金具に同様の用途があった可能性は考えられる。ただし、底板に打ち込まれたことが確実な御崎山古墳例と鋲の形態や付着する木質の特徴など、異なる点も多くみられる。また、湯舟坂２号墳から出土した靫金具が底板に装着されたものであったとすれば、底板の厚さは靫金具の縦幅と同じであった可能性が高く、2.4 ～ 2.8㎝ほどであったと推定される。両頭金具の鍔部間長は約 6.1㎝であり、底板の厚みよりもはるかに長い。木質は両頭金具のほぼ全体に付着しており、御崎山古墳例のように鋲頭が底板から飛び出していたとも考えにくい。両頭金具が靫の底板底部中央から上に打たれたものとは、現状では考えにくい。

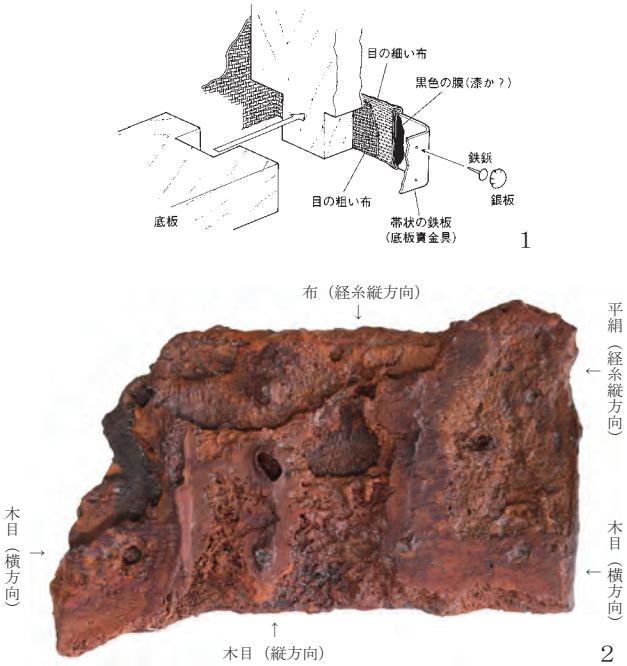
④底板の木材構造

島根県上塩冶築山古墳例の裏面には木質が付着しており、部位によって木目の方向が異なることが確認されている（図９）。このような木質の特徴から大谷晃二は、靫の長方形底板の短辺にほぞを開け、そこへ側板をはめ込むという底板の木材構造を復元した（大谷 1999a:77 頁）（図８）。同様の構造は、下川原横穴墓と御崎山古墳例（大谷 1999b:173 頁）、経僧塚古墳（田中 2010:159-160 頁）（図４-6）でも確認されており、近年に出土した栃木県伯仲１号墳例（図 4-4）でも同様の木材構造がみられることが指摘されている（小森 2019:34-35 頁）。この



1．群馬県太田市飯塚町出土

図８　靫を模した埴輪
（左：S=1/5、右：S=1/20）



1．大谷晃二による靫の底板木材構造復元案
2．木質の付着状況

図９　島根県上塩冶築山古墳出土靫金具

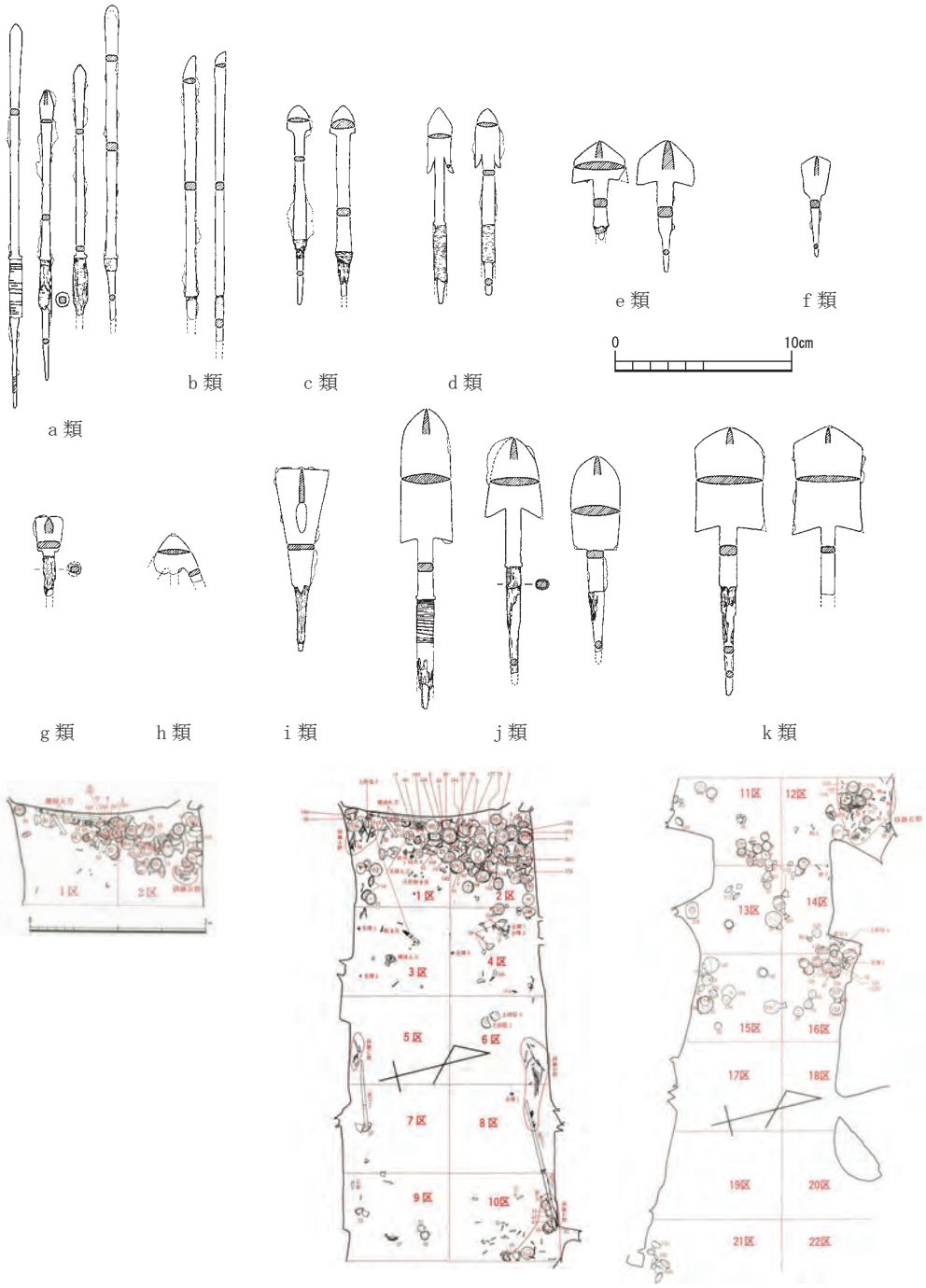
ような木材構造は、この時期の靫に通有のものであったと考えられる。なお、大谷がいう側板を、田中新史は支柱材、小森牧人は棒状部材と表現している（田中 2010：159-160 頁、小森 2019：34-35 頁）。本稿では側板と呼ぶ。この木材の用途として、田中は靫の両短辺側のほぼ中央に組み合わせ、皮張靫本体の形を保つ支柱とするものとし（田中 2010：160 頁）、小森は両脇の棒状部材と底板で靫本体の大きさが決まると推定している（小森 2019：35 頁）。底板の厚みは靫金具の縦幅とほぼ同じであるが、下川原横穴墓例にみられるように側板は底板よりも高さがあり、底板上面より上側に伸びていたと考えられる。

先述したとおり、湯舟坂２号墳出土両頭金具に付着した木質には２つの木材を繋ぎ合わせた痕跡があり、木目は軸部に直行方向に付くものと平行方向に付くものがあるようである。また鍔部間長は約 6.1㎝である。大谷の底板木材構造復元案（図９）に基づくと、両頭金具は底板と側板が重なる箇所に、底面から上方向へ打たれたか、表側から裏側へ打たれた可能性が考えられる。ただし類例はないため、確定はできない。これ以外の可能性として、弓の弭（握り手）に附属する金具も考えられる。奈良県メスリ山古墳例、福岡県惣社古墳例（齊藤 2022）、奈良県龍王山古墳例（渡辺・齊藤・土屋 2025）が類例であるが、数が少なく、詳細な検討は現時点では難しい。本例の用途については、今後も検討を続けたい。

３．湯舟坂２号墳出土鉄鏃の特徴と類例からみた位置づけ

（１）鉄鏃組成

内山敏行は、古墳時代後期・終末期における千葉県域の鉄鏃組成を分析した（内山 2011）。同地域の長頸鏃は、本稿でいう長頸柳葉形鏃や長頸片刃形鏃といった倭全域で共有される型式の長頸鏃（共有型式）と、長頸腸抉長三角形鏃という地域型式に区分が可能であり、分析の結



群	種類 / 地区	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	不明	計
A	1	33											1	34
B	2	6	1											7
	3	1												1
	4	1												1
C	5		2			2								4
D	6・8	14											1	15
E	10・12	4	8	10	11		1	1	1	1	7	4		48
	不明	2		1								1		4
	計	61	11	11	11	2	1	1	1	1	7	5	2	114

図 10　湯舟坂２号墳出土鉄鏃の各形式・出土位置・点数（鉄鏃：S=1/4、石室：S=1/80）

果、大形古墳や前方後円墳よりも、中小古墳において地域型式長頸鏃の割合が高い傾向があると指摘した。その背景として、畿内政権が武器供給に関与したのが大形古墳・前方後円墳の被葬者層までであり、中小古墳被葬者層では、武器供給に対する関与が間接的・限定的で、地域で補完する割合が相対的に高くなったためと、内山は想定している。

湯舟坂２号墳出土鉄鏃はａ～ｋ類の 11 形式に分類されている（新納 1983a:52-57 頁）（図 10）。この鉄鏃の内、共有型式は長頸柳葉形鏃[6]（ａ類）61 点と長頸片刃形鏃[7]（ｂ類）11 点である（分類名称については水野 2003 を参考にする）。また短頸腸抉長三角形鏃・短頸角関長三角形鏃（ｊ類）７点も TK43 併行期以降、日本列島の広域に分布しており（杉山 1988:635 頁、尾上 1993:70 頁）、共有型式に含められる。長頸三角形鏃（ｃ類）11 点も長頸柳葉形鏃と形態が近いものであり、広域で確認できる。

一方、地域型式は長頸腸抉柳葉形鏃（ｄ類）11 点、短頸五角形鏃（ｅ類）２点、有茎圭頭形鏃（ｆ類）１点、有茎方頭形鏃（ｇ類）１点、有茎腸抉三角形鏃（ｈ類）１点、有茎方頭形透鏃（ｉ類）１点、短頸腸抉五角形鏃（ｋ類）５点である。

本例は共有型式の割合が高く、内山のいう畿内政権による武器供給が考えられる事例にあたる。

（２）編年的位置づけ

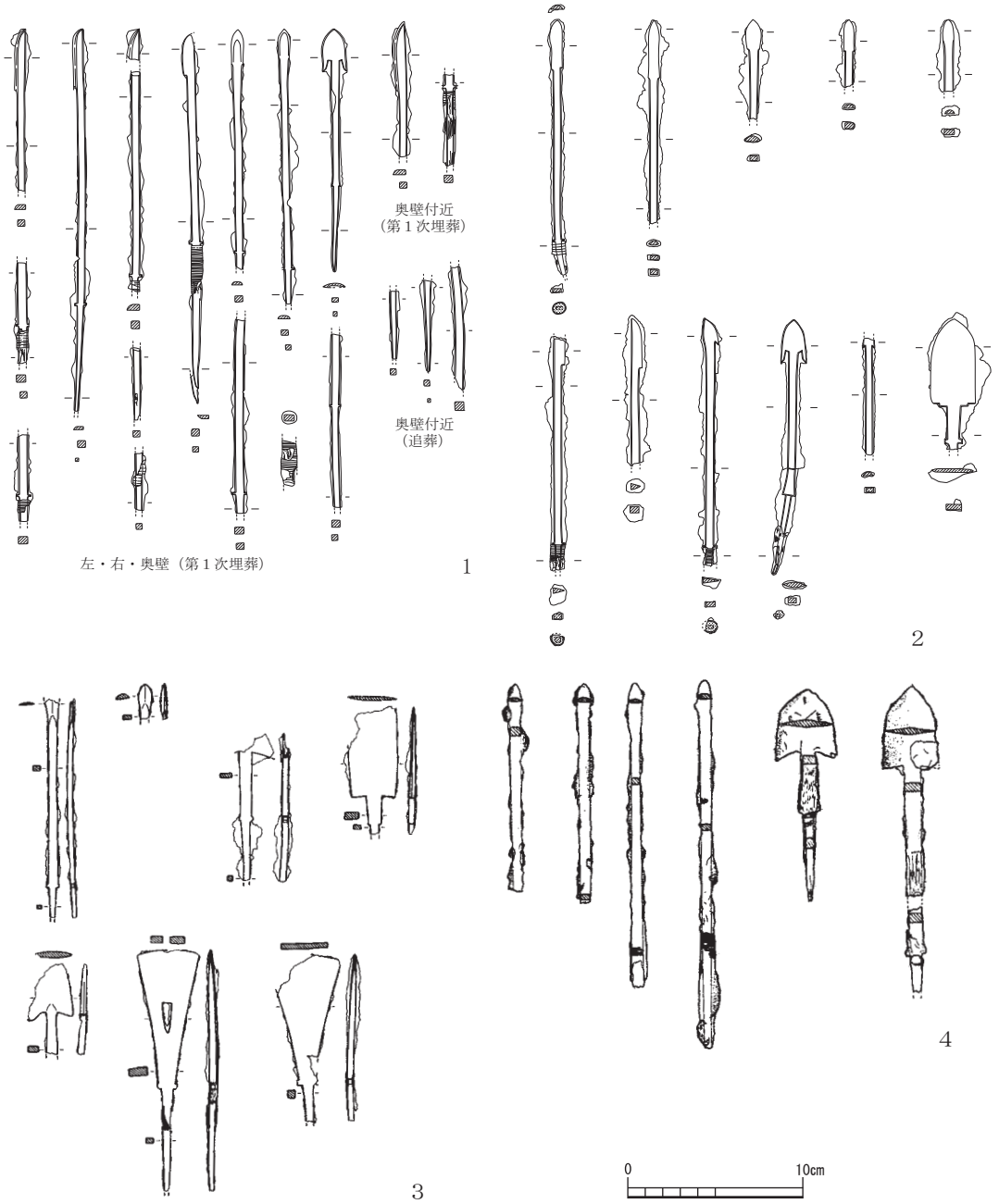
鉄鏃は玄室奥の１区（Ａ群）、玄室奥の２区（Ｂ群）、玄室中央の５区（Ｃ群）、６・８区のＤ群、玄室袖部の 10・12 区（Ｅ群）に分かれて出土した（図 10 下）。

編年的位置づけを検討するうえで基準となるのは、ａ類（長頸柳葉形鏃）とｂ類（長頸片刃形鏃）である。これらは共有型式に含められ、刃の研ぎ出し範囲が狭くなり、鏃身関が退化する方向に変化することが指摘されている（尾上 1993:65 頁、水野 1993・2003:39 頁）。ａ類とｂ類は鏃身関が明確ではなく、無関にあたる。また頸部関は棘状関である。それぞれ長頸柳葉形鏃と長頸片刃形鏃が型式変化したものであり、尾上元規編年でいうⅢ期（尾上 1993）、水野敏典編年でいう後期３段階（TK209 型式期）（水野 2003・2023）に相当する。鉄鏃はどの個体が初葬・追葬にともなうものか分からないが、ａ・ｂ類ともに玄室奥、玄室袖部を含めた横穴式石室の広範囲に分布していることから、初葬の鉄鏃も水野編年後期３段階と考えられるだろう。近隣地域の類例としては、兵庫県養父市箕谷２号墳例、香美町文堂古墳例などが挙げられる（図 11-1・2）。

（３）地域的位置づけ

ここでは先に地域型式とした鉄鏃の位置づけについて検討する。なお、長頸腸抉柳葉形鏃（ｄ類）、有茎圭頭形鏃（ｆ類）、有茎方頭形鏃（ｇ類）、有茎腸抉三角形鏃（ｈ類）、有茎方頭形透鏃（ｉ類）、短頸腸抉五角形鏃（ｋ類）は玄室袖部の 10・12 区（Ｅ群）から出土したものである（図 10）。二次的な移動を受けた可能性が指摘されてているものの（奥村編 1983:41 頁）、これらは追葬に伴うものである可能性が考えられる。

有茎方頭形透鏃（ｉ類）　有茎方頭形鏃は、元々高句麗・新羅に多くみられる形式である。６世紀前半代に新羅から影響をうけて、北部九州地域にも多く分布するようになり、TK43 型式期までには瀬戸内海沿岸地域へ広がった。さらに岡山平野地域では、独自の慣習に基づいて透かし孔を入れるようになる（尾上 1993:75 頁・1995:108 頁）。近年、須崎一幸や寒川史也によってこの鉄鏃が集成され、再検討がなされた（須崎 2004、寒川 2016）。有茎方頭形透鏃は

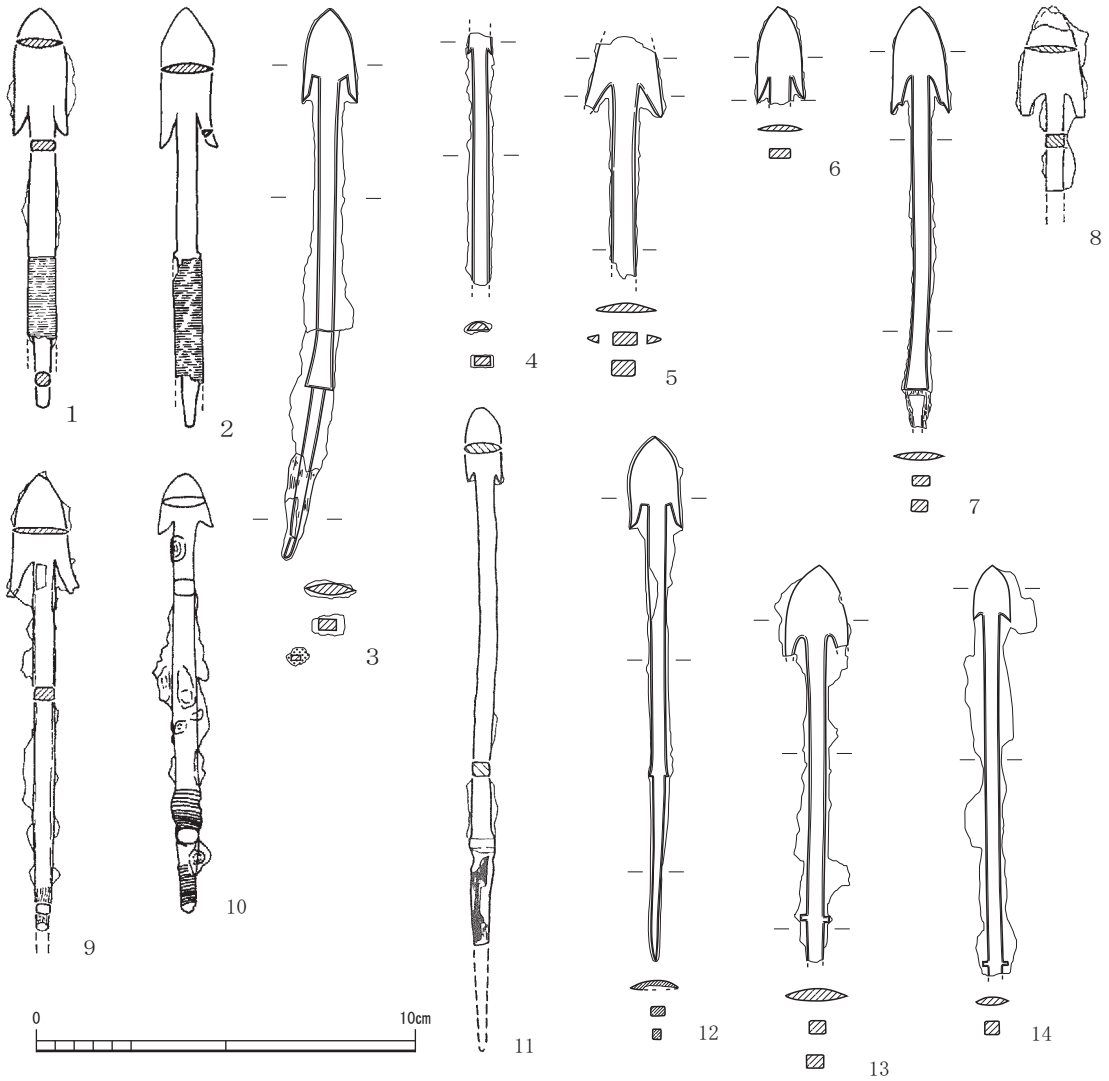


１．兵庫県箕谷２号墳　２．兵庫県文堂古墳　３．岡山県芝浦２号墳　４．静岡県駿河丸山古墳

図 11　湯舟坂２号墳出土鉄鏃の類例（S=1/4）

分布的にも瀬戸内地域に集中していることから、瀬戸内地域の地域色をもつものとして位置づけられている（寒川 2016:88-91 頁）。本例の有茎方頭形透鏃（i 類）も瀬戸内地域に由来するものであろう。類例として、岡山県芝浦２号墳例などが挙げられる（図 11-3）。

長頸腸抉柳葉形鏃（d 類）　長頸腸抉柳葉形鏃（鏃身幅が広いもの）は山陰東半部地域で独自に生み出され非常に盛行することが指摘されている（尾上 1993:75 頁）。また、近畿・瀬戸内では、棘状関をもつ長頸鏃は、特殊な例を除いて腸抉をもたないとされる（飯塚 1987:76 頁、尾上 1995:108 頁）。さらに内山敏行によると、関東・中部地方にみられる長頸腸抉長三角形鏃は棘状関をもっており、京都府北部（北丹波・丹後）～山陰地域にみられるものは直角関を

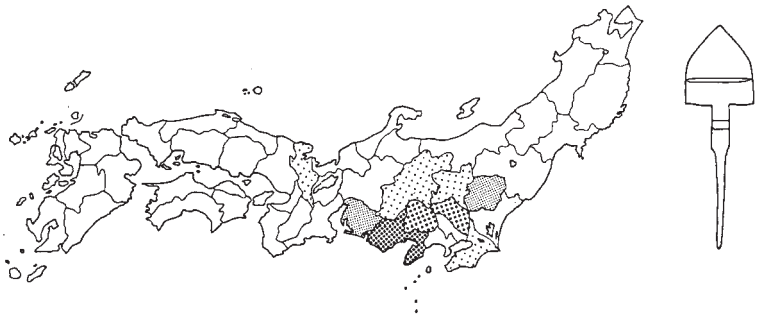


１．２．京都府京丹後市 湯舟坂２号墳　３．４．兵庫県香美町 文堂古墳　５．兵庫県豊岡市 ケゴヤ古墳
６．兵庫県豊岡市 楯縫古墳　７．兵庫県豊岡市 岩倉３号墳　８．兵庫県豊岡市 森尾大内谷４号墳
９．兵庫県養父市 西家の上１号墳　10．兵庫県養父市 沢原５号墳　11．兵庫県養父市 箕谷１号墳
12．兵庫県養父市 箕谷２号墳　13．兵庫県多可郡 東山 11 号墳　14．兵庫県多可郡 東山 12 号墳

図 12　近隣地域における長頸腸抉長三角形鏃の類例（S=1/2）

もっている点で、区別できるという（内山 1998:513 頁）。筆者も、兵庫県文堂古墳出土鉄鏃と島根県古天神古墳出土鉄鏃を検討した際、兵庫県北部や山陰地域においても、TK43 型式期以降の長頸腸抉長三角形鏃に台形関（直関も含む）という特定の頸部関が組み合うということを指摘した（土屋 2014・2018b）（図 12）。本例の場合、頸部関が直関のものもあれば棘状関のものもあり一定ではない（図 12-1・2）。直関のものは山陰東半部地域に特徴的な鉄鏃であるが、棘状関のものについては関東・中部地方など他地域に由来する可能性も考えられる。

短頸五角形鏃（e 類）・短頸腸抉五角形鏃（k 類）　この時期、鏃身部が五角形のものは、遠江・駿河を中心に、信濃や関東地方に多く分布することが指摘されている（杉山 1988:621・622 頁）（図 13-1）。この形式は、中部・関東地方に由来するものである可能性が考えられる。類例として、静岡県駿河丸山古墳例（図 11-4）などが挙げられる。



1．短頸五角形鏃の分布状況

2．有茎圭頭形鏃の分布状況

3．有茎方頭形鏃の分布状況

図 13　地域型式の分布状況図

有茎圭頭形鏃（ｆ類）・有茎方頭形鏃（ｇ類）　有茎圭頭形鏃は北部九州を中心とした九州地方に多く分布するとされる（杉山 1988:621・623 頁）（図 13-2）。また有茎方頭形鏃は先述したとおり、高句麗・新羅に多くみられる形式である。透かしのないものは、日本列島では北部九州を中心とした九州地方で極めて濃密な分布を示すとされている（杉山 1988:621・623 頁）（図 13-3）。またこれらは、岡山平野を始めとした瀬戸内海沿岸西半部地域にも一定数が分布することが指摘されている（尾上 1993:70-71 頁・1995:106 頁）。瀬戸内海沿岸西半部地域の有茎圭頭形鏃と有茎方頭形鏃は北部九州から影響を受けて、広がった鉄鏃であるようである（尾上 1995:112 頁）。湯舟坂２号墳からは有茎方頭形透鏃も出土していることをふまえると、これらは岡山平野を始めとした瀬戸内海沿岸西半部に由来するものである可能性が考えられる。

（４）鞍にともなう鉄鏃

鞍金具は奥壁右隅床面の１区から出土したものであり、鞍には鉄鏃 A 群（a 類）がともなうと指摘されている（新納 1983a:51 頁）（図 10）。鞍には鉄鏃 A 群の内、34 点が収納されていたと推定されている。a 類の長頸柳葉形鏃は先述したとおり水野編年で後期３段階、陶邑編年 TK209 型式期に位置づけられるものであり、共有型式である。鞍金具も鉄鏃と同じ時期のものであると考えられ、これらはセットで入手された可能性がある。

（5）小結

共有型式である長頸柳葉形鏃と長頸片刃形鏃からみて、初葬の鉄鏃は陶邑編年 TK209 型式頃のものと考えられる。また地域型式からは、山陰東半部地域の特徴をもつものに加え、岡山平野を始めとした瀬戸内海沿岸西半部、中部・関東地方に由来するものも確認された。これらの製作地については限定することが難しいが、様々な地域に由来する形式がみられることは特質すべき点であり、被葬者のネットワークの広さが窺える。

４．おわりに

本稿では湯舟坂２号墳から出土した鞍金具と鉄鏃の意義について、報告書作成時点との研究状況や資料状況の違いをふまえて、再検討した。鞍金具は古墳時代の事例の中でも最新相のものであり、複数の織物から構成されると考えられる有機質構造を確認した。また両頭金具の用途についても考えられる可能性を複数指摘した。鉄鏃は、陶邑編年 TK209 型式頃以降のものであり、山陰東半部地域、瀬戸内海沿岸西半部、中部・関東地方など、様々な地域に由来する形式がみられることを確認した。

湯舟坂２号墳から出土した鞍金具と鉄鏃は、報告書が刊行されて以来、当研究分野の基準資料として多く引用されてきた。著名な資料であるが、この度再評価をしてみたところ、従来注目されていなかった側面を確認することができた。湯舟坂２号墳が調査されてから 40 年以上経つが、その考古学的価値は今なお色褪せていないといえるだろう。

謝辞

本稿執筆の過程で、諫早直人氏と大谷晃二氏には様々なご教示を頂きました。

また、資料調査の際には下記の方々と機関にお世話になりました。記して感謝の意を示します。

荒井世志紀　稲葉昭智　今井智恵　小森牧人　坂本豊治　鈴木敬二　原賢二　原俊二　前岡孝彰　宮原文隆　森島康雄（50 音順、敬称略）

出雲弥生の森博物館、香取市文化財保存館、木更津市郷土博物館 金のすず、城崎美術館、京都府立丹後郷土資料館、島根県立八雲立つ風土記の丘、但馬国府・国分寺館、那珂ふれあい館、兵庫県立歴史博物館（50 音順）

本稿の内容には、JSPS 科研費（JP17H00026）、公益財団法人高梨学術奨励基金による成果を含んでいます。

註

（1）織物の素材は顕微鏡を使用しないと判断できないが、沢田むつ代の観察法に基づき、撚りをほとんどかけず引き揃えの糸を絹、撚りがある糸を植物繊維の麻とみなす（沢田 2005：49 頁）。また、平織の絹製品を平絹、麻からなる織物を布と表記し（杉井 2012:200・202 頁）、判断がつかない場合は絹と麻の総称である平織物とする。同じ素材の複数の織物が重なる場合は、糸の細いものと太いもの、あるいは織りが粗いものと密なものを区分して表記することとする。皮・革については、杉井健の定義に基づき、獣毛があるものを皮あるいは毛皮、毛が除去されたものを革と区分することができるが（杉井 2012:207 頁）、獣毛を内側に折り込んだものもあり、判断が難しいものもあるため、皮革と表記する。

（2）沢田は、経糸の本数が緯糸のそれに比べて多い、いわゆる経糸の密度が細かい経地合の織物が大部分を占めていることから、密度が細かいほうを経糸とみなすとする（沢田 2005:49 頁）。本稿でもこの観察

法を根拠とした。

（３）下川原横穴墓出土鞍金具は、初葬の TK43 型式併行期の須恵器にともなう可能性が高いことを、報告者の大谷晃二氏よりご教示いただいた。

（４）鋲数について大谷は密に多く打たれるものから、粗く少数打たれるものへの変化を推定するが（大谷 1999b：175 頁）、筆者の編年でいうⅠ・Ⅱ段階の鞍金具にみられる鋲は粗く少数打たれるものであり、変化の方向性は一定ではないようである。

（５）鋲配置２類とならなかったのは、金具縦幅に対して鋲径が大きく、２点を対に配置できなかったことなどが考えられる。

（６）あるいは長頸鑿箭形鏃とも呼ばれるが、本稿ではこれを長頸柳葉形鏃に含める。

（７）京都府北部を含む山陰東半部地域では、前の時期には長頸柳葉形鏃と長頸腸抉柳葉形鏃が多くみられたが、この時期には長頸片刃形鏃の分布域が山陰東半部地域にも広がることが指摘されている（尾上 1993：75 頁）。

参考文献

飯塚武司 1987「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅴ　財団法人東京都埋蔵文化財センター、pp.57-85

内山敏行 1998「新郭古墳群の検討」『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告 214 集）栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団、pp.506-515

内山敏行 2011「後期・終末期古墳出土の鉄鏃―東日本の場合―」『考古学ジャーナル』616　ニューサイエンス社、pp.19-22

大谷晃二（編）1996『御崎山古墳の研究』（島根県立八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ）島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘

大谷晃二 1996「総括　1　副葬品とその時期」『御崎山古墳の研究』（島根県立八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ）島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘、pp.63-66

大谷晃二 1999a「靭金具」『上塩冶築山古墳の研究―島根県古代文化センター調査研究報告書４―』島根県教育委員会・島根県古代文化センター、pp.76-78

大谷晃二 1999b「上塩冶築山古墳の時期　（３）武器　④靭金具」『上塩冶築山古墳の研究―島根県古代文化センター調査研究報告書４―』島根県教育委員会・島根県古代文化センター、pp.173-175

奥村清一郎（編）1983『湯舟坂２号墳』（京都府久美浜町文化財調査報告第７集）久美浜町教育委員会

尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性―長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として―」『考古学研究』第 40 巻第１号　考古学研究会、pp.61-85

尾上元規 1995「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について―岡山県南部を例としてみた鉄器生産の画期―」『古代吉備』第 17 集、pp.105-115

鍵谷守秀（編）1996『茂浦古墳群』（倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第５集）　倉敷埋蔵文化財センター

河野正訓（編）2024『修理調査報告　国宝　埴輪　挂甲の武人』東京国立博物館

寒川史也 2016「透かしをもつ有茎平根式鉄鏃に関して」『塚段古墳・坂口古墳』岡山市教育委員会、pp.88-96

小森牧人 2019「鞍」（栃木県古墳勉強会「栃木市伯仲１号墳（長山古墳）調査報告２」『栃木県考古学会誌』

第 40 集　栃木県考古学会、pp.34-35
齊藤大輔 2020「鞍金具」『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第 1 分冊（本文編）　木更津市教育委員会 pp.280-281
齊藤大輔 2022「古墳時代の金属製弓矢」『考古学ジャーナル』No.767　ニューサイエンス社、pp.20-24
沢田むつ代 2005「出土繊維の観察法」『季刊考古学』第 91 号（原始・古代の出土繊維）　雄山閣、pp.48-53
下山恵子・吉澤則男（編）2002『史跡古市古墳群　峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』　羽曳野市教育委員会
杉井健 2012「古墳時代の繊維製品・皮革製品」『講座 日本の考古学』 8　 青木書店、pp.197-236
杉井健 2013「古墳時代前期における鞍（矢入れ具）の生産とその意義」『眠りから覚めた城の山遺跡』（第 1 回城の山古墳シンポジウム資料）　胎内市教育委員会、pp.43-59
杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８　吉川弘文館、pp.529-644
須崎一幸 2004「「透かし」を持つ有茎鏃について」『眞朱』第 4 号　徳島県埋蔵文化財センター、pp.45-56
田中新史 2010「靫　底板金具 1 」『武射 経僧塚古墳　石棺篇　報告』早稲田大学経僧塚古墳発掘調査団、pp.159-160
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
谷本進(編）1987『箕谷古墳群』（兵庫県八鹿町文化財調査報告書第 6 集）　八鹿町教育委員会
土屋隆史 2014「文堂古墳出土鉄鏃の意義」『兵庫県香美町村岡　文堂古墳』（大手前大学史学研究所研究報告第 13 号）　大手前大学史学研究所・香美町教育委員会、pp.177-184
土屋隆史 2018a『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣
土屋隆史 2018b「古天神古墳出土鉄鏃の位置づけ」『古天神古墳の研究』（島根大学考古学研究室調査報告第 17 冊）　島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会、pp.103-110
土屋隆史 2023「古墳時代後期における金属製玉・盛矢具・冠・飾履の編年」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ―交差編年の手がかり―発表要旨集・後期古墳資料集成』中国四国前方後円墳研究会第 26 回研究集会、pp.99-104
寺脇隆彦・中田健一・大谷晃二 1995「石見町下川原墳墓群の調査」『島根考古だより』第 48 号　島根考古学会、pp.2-9
栃木県古墳勉強会 2019「栃木市伯仲 1 号墳（長山古墳）調査報告 2」『栃木県考古学会誌』第 40 集　栃木県考古学会、pp.25-57
豊岡市教育委員会 1995『豊岡市 森尾大内谷古墳群 ―豊岡中核工業団地造成に伴う発掘調査報告書―』（豊岡市文化財調査報告書 30）
奈良県立橿原考古学研究所（編）1990『斑鳩藤ノ木古墳第 1 次調査報告書』斑鳩町
新納泉 1983a「武器」『湯舟坂 2 号墳』（京都府久美浜町文化財調査報告第 7 集）　久美浜町教育委員会、pp.52-57
新納泉 1983b「まとめ　（１）武器」『湯舟坂 2 号墳』（京都府久美浜町文化財調査報告第 7 集）　久美浜町教育委員会、pp.90-100
花谷浩 1983「馬具」『湯舟坂 2 号墳』（京都府久美浜町文化財調査報告第 7 集）　久美浜町教育委員会、pp.57-67
兵庫県教育委員会 1983『沢原 5 号墳・高田遺跡発掘調査報告書』
水野敏典 1993「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬―長頸鏃の形態変遷と計量の相関にみる武器供給から―」

『古代』第 96 号、早稲田大学考古学会
水野敏典 2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』第 8 回東北・関東前方後円墳研究会大会、pp.29-41
水野敏典 2009『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』（平成 18 年度～ 20 年度科学研究費補助金基盤研究 C 調査研究成果報告書）
水野敏典 2023「古墳時代後期の鉄鏃編年」『後期古墳研究の現状と課題 I ―交差編年の手がかり―発表要旨集・後期古墳資料集成』中国四国前方後円墳研究会第 26 回研究集会、pp.147-158
三好栄太郎 2009「両頭金具の構造と奈良県における出土例」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』（2006 年度～ 2008 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書） 熊本大学文学部、pp.207-218
望月董弘 1962『駿河丸山古墳』静岡考古館・静岡工業高等学校
八鹿町教育委員会 1992『西家の上古墳群』（兵庫県八鹿町文化財調査報告書第 10 集）
吉村幾温・千賀久（編）1988『寺口忍海古墳群』（新庄町文化財調査報告第 1 冊） 新庄町教育委員会
渡辺夏海・齊藤大輔・土屋隆史 2025「樋口清之による奈良県龍王山古墳群の踏査と採集資料－鐔・両頭金具・胡籙金具・扁円魚尾形杏葉－」『國學院大學博物館研究報告』第 41 輯 國學院大學博物館、pp.1-18

挿図・写真出典

図 1- 上：奥村編 1983 より引用。下 : 栗山雅夫氏撮影

図 2・3: 筆者作成

図 4-1・2: 下山・吉澤編 2002 より引用 3：吉村・千賀編 1988 より引用 4：栃木県古墳勉強会 2019 より引用 5：筆者実測（香取市文化財保存館） 6：田中 2010 より引用 7・8: 奈良県立橿原考古学研究所編 1990 より引用 9：大谷編 1996 より引用 10: 寺脇・中田・大谷 1995 より引用

図 5: 筆者撮影（木更津市郷土博物館 金のすず）

図 6-1 ～ 3: 奥村編 1983 より引用 4 ～ 6: 諫早直人氏提供 7 ～ 9: 栗山雅夫氏撮影

図 7-1: 大谷編 1996 より引用 2：筆者撮影（島根県立八雲立つ風土記の丘）

図 8：河野編 2024 より引用

図 9-1: 大谷 1999a より引用 2：筆者撮影（出雲弥生の森博物館）

図 10: 奥村編 1983 より引用（一部改変）

図 11-1: 筆者実測（兵庫県立歴史博物館） 2：筆者実測（香美町教育委員会） 3：鍵谷編 1996 より引用 4：望月 1962 より引用

図 12-1・2: 奥村編 1983 より引用 3・4: 筆者実測（香美町教育委員会） 5：筆者実測（豊岡市教育委員会） 6・7: 筆者実測（但馬国府・国分寺館） 8：豊岡市教育委員会 1995 より引用 9：八鹿町教育委員会 1992 より引用 10: 兵庫県教育委員会 1983 より引用 11: 谷本編 1987 より引用 12: 筆者実測（文化庁） 13・14: 筆者実測（那珂ふれあい館）

図 13: 杉山 1988 より引用

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2